

[論文]

## 例祭の伝統色彩 — 熱田神宮の大祭を通して —

早川 礎子

### 1. 研究の背景と目的

古来より、五色は陰陽五行説[注01]と結びつき、四神（五神）相応思想の色彩象徴を表してきた。四神とは、中国の五行思想に由来する、東—青龍、南—朱雀、西—白虎、北—玄武の四方位に、それらを象徴する色彩と共に配した方位神である。いずれも想像上の動物で、龍、鳳凰、虎、亀と蛇の合体したものであった。

今日の神道の祭礼では、このような伝統色彩である五色、すなわち陰陽五行説を起源とし、方位の守護神を象徴する五色を、装束・幣帛[注02]・四神旗の色彩として用いている。

五色に着目して歴史的背景を概観したい。

縄文期から、アニミズムを源流として山岳信仰が成立し、密教系仏教と習合し修験道が形成されていった。更に、インドから中国へ伝わった占星術の宿曜道などと複雑に習合しつつ、日本独自の陰陽道の母体が形成されていった。

五色が用いられ始めたのは、古墳時代の壁画古墳[注03]に端を発するが、五色が方位を

守護する四神の霊獣の色彩象徴性をもったのは、飛鳥時代（593～694年）から、奈良時代（701～784年）、平安時代（794～1167年）にかけての時代が最盛期とされている。

飛鳥時代においては、中国・朝鮮半島の影響を受け、仏教が国家の中核的思想へと位置づけられ、五色は、キトラ古墳[注04]・高松塚古墳[注05]（奈良県高市郡明日香村）の方位を守護する四神の霊獣の色彩として用いられた。

平安朝の有職故実に詳しい鳥居本（2006）は、陰陽五行説に対応した五色の起源について、高松塚古墳壁画の人物と共に描かれた黄色の北斗七星は陰陽五行説の方位と一致すると述べる[注06]。

吉野（1984）は、古代呪術史研究から、「方位神の四神に全て色彩の名がつけられている事実は、色彩と空間の関連の深さを示す」と結論づけている[注07]。

また、吉野（1992）は、「東と西、西と東の間には『穴』があり、神も太陽も人も、この穴に籠ることなしにも移動することはできない。古代日本人にとって東は神界、西は人間界を意味していた」[注08]

と、中央の方位が象徴するところを明らか

にしている。吉野(1984)は、方位と色彩が対応していないと述べているが、明確な五行の五色との対応性については言及していない。

そして、五色の象徴性は、日本服飾史の中で文献に残る最古の服制、推古天皇十一年(六〇三)に聖徳太子が定めたとされる制度の冠位十二階[注09]を嚆矢とする位色の五色として継承された。その色彩とは、最高位の色彩を紫とし、青(緑)・赤・黄・白・黒の順であった。武田(1989)によれば、陰陽五行説の五色に対応する服色には、色彩の等価値の象徴性が含まれ、その五色は循環する機能があると明らかにしている[注10]。そして、日本において連綿と継承されていた五色の位色が、中国において広まらなかった理由を、この五行の循環性と結論づけている。

飛鳥・奈良時代に隋や唐の文化に憧憬していた貴族階級は、894(寛平6)年の遣唐使廃止により、唐(中国)の影響を受けていた文化が色彩文化の面でも、日本の風土に合った優美で細やかな貴族中心の国風文化を確立する。

このような文化基盤の中で、陰陽五行説を継承し、日本独自の信仰となった陰陽思想は貴族間で流行した。陰陽思想とは、中国の地相占いで、北に山、東に川、南に池、西に街道が走る土地は、土地を守る四神のエネルギーが最高に発揮される理想の土地としていた。平安時代では、四神(青龍、朱雀、鳳凰、白虎、玄武)、または、黄に対応する黄龍(麒麟)を含み、四神(五神)相応思想が貴族達に継承された。この四神(五神)は、五色と密接に結びついていた[注11]。

しかしながら、これまで今日の神道の祭礼において、このような歴史的背景をもった五

色が、四神(五神)相応思想にみられる象徴性を継承しているかについては宗教学、民俗学からの五行思想についての研究はなされているが、デザイン学からの伝統色彩についての研究は十分になされていない。

具体的には、四神(五神)相応と方位に関連について、民俗学からの神への供物である神饌の現地調査研究は行われているが、色彩に着目する調査はなされていない。民俗学研究では、古代呪術についての研究は行われているが、五色の色彩象徴についての研究は行われていない。神道学研究及び、仏教学研究において文献から言及した論考は多い。しかし、神道の祭礼における装束・幣帛の五色について、事例研究に基づいた祭礼の個別的な研究は十分に言及されてはいない。

そこで本研究は、デザイン学の視点から熱田神宮[注12]の例祭における装束・幣帛の配色方法、すなわち五色の黄色に着目し、祭礼において五色の象徴性がどのように継承されているのかを導出することを目的としている。

## 2. 研究方法

本稿では、文献調査に基づき、熱田神宮の例祭の五色の事例を整理すると共に、現地調査を実施し、例祭における五色のあり方を考究した。

本稿の調査地である熱田神宮(愛知県名古屋市長熱田区)は、年間六十度の恒例の祭礼と十余度の特殊神事が連綿と受け継がれる。その祭礼は、平安王朝の有職故実に則り、継承されている。また、熱田神宮は、伊勢神宮に

次ぐ官幣大社[注13]、勅祭社[注14]、国家鎮護の神宮である。以上の事由により、祭礼における伝統色彩の五色を観察する適切な調査地と考えた。

本稿では、まず最初に、例祭の装束・幣帛における五色の調査を行う。次に、例祭における五色の黄色に着目し分析を行い、最後に五色と方位の対応関係を考察する。

### 3. 大祭の装束規程

本節では、例祭における装束・幣帛における色彩の調査分析に先立ち、祭礼装束の衣服構成をみていきたい。

#### 3-1 装束の衣服構成

初めに装束の分類についてみていきたい。

「装束」とは、祭祀に奉仕する際に身につける服装のことであり、特殊神事を除く、大祭・中祭・小祭における装束の色彩は神社本庁規則によって、ほぼ統一されている。装束は、古くは大陸伝来の装束（礼服・朝服等）が用いられていたが、平安時代の遣唐使廃止以後は、日本固有の服装に改められた。具体的には、男子の儀式などの時に着用する束帯、朝廷で着用する衣冠単である。

今日の男性神職の衣服形態は、平安時代の束帯・衣冠単を踏襲する。

祭礼は大祭・中祭・小祭・特殊神事の区別があり、装束も各祭礼で、使い分けられている。

#### 3-2 大祭の装束の衣服構成及び色彩

次に、大祭の装束の衣服構成及び色彩につ

いてみていきたい。

衣冠単では、冠（繁文）・袍・単・奴袴・笏・檜扇・帖紙・浅沓を着ける。

袍の色彩は、大宝令の制で位階により、紫・緋・緑（青）・縹（以上有位者）・黄（無位）に分け、縹以上は各深浅の区別があり、全て九階に定めている。後に、平安中期に改変があったが、一条天皇の頃から一位より四位までが黒、五位が緋、六位以下の有位者が縹となった。現制の祭礼装束の色彩は、ほぼこれに準拠したものである[注15]。

大祭の袍の色彩は、神職の身分により特級・一級が黒袍、二級上・二級が赤袍、三級・四級は緑袍の序列で分かれている。熱田神宮の神職の間では、「青袍」と呼ばれているが、装束の色の規定では、緑となる[注16]。今日の緑袍は、色相では青に当たる。単は、袍の下に着用する丈の短い裏無しの衣で色彩は、上衣下衣紅色になっている[注17]。

奴袴（さしぬき）の色彩は、身分によって分かれており[注18]、特級は白固織・文藤の丸、一級は、紫固織・文藤の丸、二級上は紫固織・文藤共緯、二級は紫平絹、三級・四級は浅黄平絹の序列である。特級は、白固織文藤の丸裏同色平絹、熱田神宮の宮司は、これを着用する。一級は、紫固織文藤の丸裏同色平絹、これは藤の丸文が入った紫固織で、文が二級上の奴袴の色彩より白く浮き出ているのが特徴であり、熱田神宮の権宮司は、これに当たる。二級上は、紫固織文藤の丸共緯裏同色平絹である。これは一級の藤の丸文は同じ形であるが、一級の文よりは白く浮き出していない。これは、熱田神宮では禰宜・権禰宜が着用する。二級は、紫平絹・裏同色平絹を着用する。これは文がない紫である。この奴

袴を着用するのは、熱田神宮では権禰宜である。三級と四級は、浅黄平絹裏同色平絹である。これを着用するのは、熱田神宮では権禰宜である。この身分に対応する奴袴の色彩は、職階と必ずしも対応していない。

以上の文献調査から、大祭の装束の色彩には、五色に対応する黒・赤・緑（青）・白が用いられ、五色の黄色に対応する黄色が装束から除かれていることが読み取れる。

### 3-3 例祭の現地調査

本節では、現地調査を行った例祭における装束・幣帛の五色と方位の対応関係について着目する。

例祭は、毎年6月5日に行われる。

熱田神宮の五穀豊穰・皇室の弥栄・平安を祈る祭礼である例祭は、天皇の勅使が参向する最も荘厳、重要な祭礼とされる。この勅使の参向を頂く社を勅祭社と称する。1917（大正6）年に、はじめて天皇の勅使が参向し以来、勅使の発遣は変ることなく、今日にまで及ぶ。

他の熱田神宮の祭礼と異なることは勅使を迎え、神への五色の布の捧げものである幣帛である御幣物を奉じ、勅使が黄色の紙に書かれた御祭文を奏上することである。この祭礼で用いられる幣帛は、御幣物（ごへいもつ）と称し、他の祭礼の幣帛と区別される。

宮中から、奉幣される幣帛は、五色紵（ごしきあしぎぬ）、すなわち五色の平織の布帛で、麻布、絹糸、木綿糸を紙で包んで柳筥に納め、柳筥を更に白い布で包み、麻苧で上下二箇所を結切に括る。これは、先述の十二階の冠においても当色の紵でつくることが定められていた。平安時代から使われてきた禁色

という言葉は、天皇や公卿などの身分の高い人の着る衣服の色（黄櫨染・黄丹・赤色・青色・麴塵等）を下位の者が用いることを禁じる意味であるが、色彩だけでなく、上質の絹織物の使用を禁じる意味も含んでいた。

五色紵とは、青（緑）・黄・赤・白・黒の五色の絹織物のことである[図1]。熱田神宮の奉幣されている幣帛は、白色の絹と麻であり、五色紵が祭礼の中で特別な幣帛であることが伺われる。

また、天皇の御祭文の紙は黄色とされる[図2]。伊勢神宮が縹色とされるのに対し、熱田神宮と賀茂神社は、古来より黄色とされている。

祭式は、次のように行われる。

宮司以下祭員[注19]は、斎館において衣冠単に更衣し、斎館前に黒袍、赤袍、緑袍の序列で列立する。宮司・権宮司・禰宜は西上南面に、権禰宜以下祭員は西上北面に列立する。[図3]。この祭式に示されている「上」とは、本宮、すなわち神への方向を示していると神職は述べる。

神職の奴袴の色彩は、宮司が白固織文藤の丸、権宮司が紫固織文藤の丸、禰宜は紫固織文藤の丸、権禰宜は紫固織文藤の丸共緯、紫平絹を神職の身分の序列によって着ける[図4]。

他の大祭と異なることは、神職は、冠に木綿鬘に着けている。これは、物忌みの標識で、頭部にかける木綿で作ったもので、木綿とは潔白・清浄の意味をもち、多く還座の際、清浄の標識として用いられる。ここから、例祭が特別な祭礼であるということが分かる。

次に、緑の布で覆われた折櫃に入った五色紵と、天皇陛下の黄紙に書かれた御祭文の御

幣物を勅使随員2名が担ぎ、勅使・勅使前導所役が、西上南面に列立する。勅使は、黒袍の衣冠単に更衣し、木綿鬘を冠に着け、紫固織文藤の丸の一級の身分の奴袴を着用する[図5]。ここから、祭礼の参進の序列で、特級の宮司が最前列に並ぶが、五色繩と黄色の御祭文を持つことによって、参進の序列が変化したことが認められる。

祓所では、前導所役の緑袍の権禰宜一員が前導し、黒袍の勅使・赤袍の勅使随員、前導所役の緑袍の権禰宜一員が前導し、黒袍の宮司、黒袍の権宮司、赤袍の禰宜、赤袍の権禰宜の序列で本宮石段下において修祓し、本宮へ参進の列をつくる[図6]。神職が参進する時、参道の中央の「正中」が除かれていることから、天皇の御幣物の五色の黄色の御祭文・五色繩の黄色が、祭礼から除かれた陰陽五行説に対応する中央の方位を象徴する黄色に対応する色彩でないことが分かる。つまり、五色に対応する神職の袍に除かれている黄色を表すものではなく、この黄色の御祭文、五色繩は、中央の方位を表していないことが認められる。

本宮へ参進では[図7・8]、「正中」の方位である中重版を中心に、東から西へ職階・身分の高い黒袍の宮司、黒袍の権宮司、赤袍の禰宜、赤袍の権禰宜、緑袍の権禰宜の序列で座る[図9]。勅使は、御幣物と共に「正中」の中重版に近い、西上北面の位置に座る[図10]。

「正中」の方位を中心にして、黒袍の宮司と、黒袍の勅使が座ることが伺える[図11]。御幣物を勅使随員が、宮司に手渡す時、「正中」を越えていない。これから、「正中」が中重版においても除かれることが伺える。このこ

とから、御幣物の五色繩の「黄色」と「黄色」の祭文は「中央」の方位と対応しておらず、「神」を象徴しているものではないことが読み取れる。すなわち、中央の方位を象徴する黄色に対応する色彩は別に存在するということが分かる。

本宮からの退出は、前導所役の緑（青）袍の権禰宜が前導し、黒袍の勅使が退出し、前導所役の緑（青）袍の権禰宜が前導し、黒袍の宮司、黒袍の権宮司、赤袍の禰宜、赤袍の権禰宜、緑（青）袍の権禰宜の序列で、参道の「正中」を外して退場する[図12]。つまり、黄色の御祭文、五色繩の黄色が五色の黄色に対応していないことが認められる。

齋館前庭に、宮司、権宮司、禰宜は西上南面に列立し、権禰宜以下祭員は西上北面に列立する。「上」の方位とは、神への方位を暗示していることが伺われる。[図13]。すなわち、祭礼に神の存在を暗示させていることが伺われる。

以上の調査から、明らかになったことを要約すると、次のようになる。

- (1) 黄色に対応する色彩は、例祭以外の大祭の祈年祭・新嘗祭、奉賛会大祭では用いられていないが、例祭にのみ御祭文・五色繩の黄色が取り入れられることが分かった。
- (2) 例祭で用いられる幣帛・五色繩の黄色は、祭礼の中で中央の方位を示していない。

## 4. 考察

前章の例祭における御祭文・五色繩の黄色

に着目した調査の分析によって以下の結果を得た。

五色に対応する黄色に対応する色彩は、例祭以外の大祭の祈年祭・新嘗祭、奉賛会大祭では用いられていないが、例祭にのみ御祭文・五色紵の黄色が取り入れられることが明らかになった。また、祭礼の列立・参進・着座において、例祭で用いられる幣帛・五色紵の黄色は、祭礼の中で中央の方位を示していない。

○五色に対応する黄色が除かれている理由は二つあると考えられる。第一の理由は、五行思想に内包する循環性のため、五色に対応する黄色が除かれると考えられる。第二の理由は、祭礼において、中央の方位を示す正中は、常に除かれる方位であるため、中央と対応する黄色は除かれると考えられる。本章では、五色の黄色に対応する黄色が、祭礼から除かれる理由を考察していきたい。

#### 4-1 五行思想の循環性

例祭において、五行思想の内包する循環性によって、五色に対応する黄色が例祭の装束・幣帛の色彩から除かれていると考えられる。

この色彩による序列が用いられなかった理由として、武田(1989)は、衣服の色体系によって、身分の上下を可視的に示すことは最も簡易にして、明確に等差表示の機能を果たすと述べ、服色に対する制約があったためと述べている。

更に、武田(2001)は、五色を序列において取り入れなかった理由を

「陰陽五行による五徳終始の特質には、五行相生(木・火・土・金・水)の説にしても、五行相克(木・土・水・火・金)、あるいは五行始生(水・火・木・金・土)の説にして

も、その基本性格が、循環にあるということである。そこでは五行そのもの、あるいは五行に対応する色彩、行方、季節等も、基本的には等価値なものの中で循環するものであり、そのうちの一つを最高位に置いて序列を決するという事は、本来できない性質のものである。」[注20]

と述べている。

このことは、すなわち、五行の各々の一方に勝っても、他方に負けるのであり、順次後続する行にとって変わられ、必ず置換することを象徴的に意味すると考えられる。

このような五行思想が内包する性格は、五行説に拠って、五色間に序列をつくり、その服色で王朝での身分の上下の等差を設定するという発想を困難にしていると考えられる。しかし、同時代の中国において、祭祀の装束の色彩として、五行思想に対応する五色が存在することは注目に値する。五行思想そのものに基づいた、五色の衣服が存在したことは明らかであるが、官人の貴賤を表示するものではなかったと述べている。天皇を象徴する色彩は五色の黄色に対応していないと、武田(1991)は指摘している。

「律令以前から白を貴い色として、天皇の衣服を白とする。黄櫨染が天皇の衣服としてあらたに規定された時、帛衣(白い練り絹)でできた衣は「大小神事」の時に限定して着用される衣服となった。」[注21]

と、述べる。祭礼において、天皇の装束が白であったことから、五色の黄色に対応する色を除くことで、五色と対応する黄色を、その他の四色から別格の位置においているのではないかと考える。五行思想では、循環するという性格によって、循環してはいけない地

位の対応する黄色を祭礼の色彩から除いていると思われる。

以上をまとめると、五行思想では、五色が循環するという性質を持っている。五色の中の黄色は、中央の方位と対応している。この中央の方位が、例祭で除かれるのは、黄色が、神職の装束の色彩とは異なる身分の特別な地位を表す色彩であるからと考えられる。

#### 4-2 正中（中央）を除いた祭礼空間

五色の黄色に対応する方位は、中央の方位であるから除かれると考える。神道では、参道の真ん中を通る線を「正中」と呼び、神が通る道であるため、人は通ってはならないとされている。つまり、祭礼空間において、「正中」は、常に除かれなければならない方位と考えられる。

神道の祭式では、列・参進・着座において、常に「上」を意識している。熱田神宮の神職は、「上」とは「神」と述べている。このことは、神を象徴するものは常に比されているにもかかわらず、祭礼において神の存在を暗示させていると考えられる。

神社本庁（1991）によれば、

##### 「第一 通則」

##### （一）祭場の位次

一、神前に近きを上位とし、遠きを下位とす。

二、正中を上位とし、左を次とし、右を其の次とす。〔注22〕

とされている。

このことから、正中は上位であり、すなわち中央の方位が上位と読み取れる。そして、神に近い方位を上位としていることから、正中すなわち中央の方位が神に近い方位である

と考えられる。

神社本庁教学研究所（2004）は、

「方位では「東・南・中央・西・北」を示すので、「土=黄=中央」が最も尊貴である。

また、神社の殿内装飾として用いられる四神旗（しじんぎ）に描かれている四方位の霊獣も、それぞれの五行に配されており、貴き中央を除き東は青龍、南は朱雀、西は白虎、北は玄武となっています。

〔注23〕

と述べる。

ここでも、中央が高貴な方位とされ、高貴な方位のために除かれていると指摘される。神社本庁教学研究所（2004）は、中央の方位に対応する色彩が黄色であることが指摘する。

吉野（1984）は、

「方位の神の四神に、すべて色彩名がつけられている事実は、色彩と空間の関連の深さを示す」〔注24〕

と、方位と色彩の対応性を指摘する。このことから、中央の方位が例祭から除かれることは、黄色との対応関係があると考えられる。

吉野（1992）は、祭礼の場は「太陽・神・人」が存在すると述べる。

「神・太陽・人は不動ではなく、東から西へ、西から東へ動くものであってこの世に常在しない。東と西、西と東の間には「穴」があって、神も太陽も人も、この「穴」に一時、こもることなしには、西方へ、あるいは東方に出ることはできない。」〔注25〕

吉野（1992）の述べる「穴」とは、

「神界を象徴する東と、人間界を表す西との中央にある。東から、西へ、西から、

東への神及び人間の去来する中央」[注26]

と、述べることにみられるように、東と西の中央の方位と考えられる。

ここから、中央の方位が、神界と人間界の中央の位置にある方位であり、その他の四方位と別格の方位であることが考えられる。吉野(1992)の述べている「穴」すなわち中央の方位とは、東西軸の中で、超越した空間であると考えられる。そのため、五色の黄色に対応する方位は、超越した空間である中央のため除かれていると思われる。祭礼空間において、この他の方位から、超越した空間である中央の方位である「正中」は、常に除かれなければならない方位であり、中央の方位に対応する黄色も、それゆえに除かれていると考えられる。

小池(1998)は、位色の役割について、服飾形式や、地質、文様、装飾等に見られるように、身分による衣服の区別は、色彩だけではなかったと述べる。

そして、  
「中でも位色や禁色という色についての制度が重視されたのは、それらが宮廷社会における天皇と臣下との関係序列を一目瞭然に示すものだったからである。」[注27]と述べる。

位色の序列が定まっている中において、あえて中央の方位を除くことは、除くことにより中央に対応する吉野(1992)の述べる超越した方位あるいは空間を暗示させていると考えられる。

以上をまとめると、中央の方位は四方位と別格の方位で、「穴」=中央は、東西軸の超越空間であると考えられる。そのため、五色の

黄色に対応する方位は、超越する中央の方位のため除かれる。祭礼において、この中央の方位は常に除かれ、そのため、この中央の方位に対応する黄色も除かれていると考えられる。

## 5. 結論

本研究は、例祭における装束・幣帛の五色の用いられ方に注目して、五色の象徴性がどのように継承されているのかを明らかにすることを目的とし、分析・考察をし、以下を導出した。

### (1) 五行思想の循環性

五行思想では、五色が循環するという性質を持っている。五色の中の黄色は、中央の方位と対応している。この中央の方位が、例祭で除かれるのは、黄色が、神職の装束の色彩とは異なる身分の特別な地位を表す色彩であるからと考えられる。

### (2) 正中(中央)を除いた祭礼空間

中央の方位は四方位と別格の方位で、「穴」=中央は、東西軸の超越空間であると考えられる。そのため、五色の黄色に対応する方位は、他の四つの方位より超越している方位の中央のため除かれると考えられる。そのため、祭礼において、中央の方位は常に除かれ、中央の方位に対応する黄色も除かれていると考えられる。

今後、更に祭礼における五色等に見られる伝統色彩文化の象徴性について、個別事例の調査研究し、その象徴性を詳細にデザイン学の視点から解説していく必要がある。その伝統色彩文化が、今日の祭礼空間で、いかに継



承されているかを調査することが今後に残された課題である。

注

01) 陰陽説とは、宇宙間における森羅万象を、陰と陽の関係の二元論であり、天象には太陽（日）と太陰（月）の二元があり、人間には男女両性があると相対するものを置く。

陰陽が互いに交感・交合し生成化育・榮枯盛衰を繰り返すが、その作用が五行である。「五」は宇宙の五原素、「木火土金水」、「行」は作用の意味である。「行」は、動きを示し、五原素の作用循環が五行といえる。「木火土金水」は互いに相生し、相克して、万物の盛衰の輪廻を繰り返させる。相生と相克の理は、日本の祭礼に広汎に活用される。木・火・土・金・水は、互いに相生、相剋し輪廻するが、宇宙の万象、色彩・方位・季節・惑星・人間精神・徳目をも象徴する。五色は方位と対応していることは、本稿のテーマと一致している。

五行	木	火	土	金	水
五色	青	赤	黄	白	黒
五方	東	南	中央	西	北
五時	春	夏	土用	秋	冬

02) 熱田神宮文化課（1999）24頁より引用

03) 王塚古墳壁画（福岡県桂川町）は、壁面をペンガラ（黄土を焼いてつくった赤色の顔料）で赤く塗った上に白・黄・緑・黒の丸や三角形、草花、武器、動物等を描いている。それは、まだ具象になっておらず、幾何学的文様及び形象的文様によって表している。赤く塗りつぶされた天井には、黄色の円文が描かれ、この黄色の円は満点の星を表すと考えられている。珍敷塚古墳（福岡県浮羽郡吉井町）のガマ（釜）は古代中国では、月の象徴といわれている。天井に黄色によって、星座を表しているところに、後述するキトラ古墳・高松塚古墳との共通性が見られる。

04) 高松塚古墳から北におよそ1キロメートルに、キトラ古墳がある。キトラ古墳は、天文図や獣頭図人身像と共に、北壁には玄武が黒で描かれ、南壁には朱雀が赤で描かれている

05) 高松塚古墳の壁画は、青龍（東）、朱雀（南）、白虎（西）、玄武（西）、そして日輪（太陽）が右に描かれた青龍の上に描かれた。そして、下に描

かれた白虎の上に月輪（月）が描かれている。

06) 鳥居本幸代著（2005）22頁参照

07) 吉野裕子（1984）151頁より引用

08) 吉野裕子（1992）33頁より引用

09) 小池三枝（1998）『服飾文化論』光生館75頁

冠の色彩において、紫（大徳・小徳）、青（大仁・小仁）、赤（大礼・小礼）、黄（大信・小信）、白（大義・小義）、黒（大智・小智）に分けられ、大は濃く、小は薄く染められていた。「この当色が具体的にどのような色であったか不明」と指摘されている。天武11（685）年には、冠は黒の漆紗と統一的に規定されたため、以後、服色の違いによって位階を示すようになった。その時の位色は、以後、次のような序列になっている。持統天皇4（690）年、最上位は黒紫、赤紫、緋、深緑、浅緑、浅縹、文武天皇大宝元年（701）年の衣服令では黒紫、赤紫、深緋、浅緋、深緑、浅緑、浅縹となっている。

10) 武田佐知子（1989）130頁

11) 陰陽五行説は、紀元553（欽明天皇14）年に正史に記載され、602（推古10）年には暦本・天文地理等の移入後、天武朝では、その盛行は頂点に達す。桓武天皇（737-806）は、陰陽五行説のト占によって風水にかなった京都の地を選んだといわれるほど、政治と深く関わる。

794年、平安京遷都を行った桓武天皇は、陰陽五行説に基づく青（緑）色の青龍・赤色の朱雀・白色の白虎・黒色の玄武を四方の守護神として配置する四神相応による都市計画で平安京を建設し、怨霊を陰陽道信仰によって駆逐したとされる。院政期、疫病が大流行し、菅原道真の怨霊が落雷となって焼死せしめたと信じられた事件などによって、陰陽道信仰は再び勢力を拡大し重視される。

宮中で行われる四方拝、方違え所の制限も、陰陽道の思想が随所に見られている。陰陽道では、八方をめぐって悪い方角を塞いで守る中神（天一神）と称する守護神が存在し、この中神がいる方角は悪い方角（方塞がり）となる。国家的行事をはじめとする平安時代の年中行事には方角に関して陰陽思想の色彩をもつものが多く見られる。陰陽五行説及び、その実践としての陰陽道は日本渡来以来、国家組織の中に組み込まれて一貫して朝廷を中心に祭政、占術、医学、農業等の基礎原理となる。

12) 神宮とは、「神の宮」の意味で、かつては伊勢神宮、明治神宮、石上神社など、最も尊ばれる「神の宮」を指す。熱田神宮宮庁（2002）100～101頁参照

- 13) 皇室の祖神、天皇や国家に功労があった神を祀る。律令制度の確立と共に全国の神社の中から、特に官社という社格の神社が定められた。927年に完成した延喜式神名帳に載っているのは、全国の官社で2,861カ所3,132坐（神の数）。
- 14) 天皇の使いの勅使が来て祭祀が行われる神社。11世紀には、最終的に22社に定められ、22社奉幣（ほうべい）制度と呼ぶ。
- 15) 陰陽道は、古代中国で発達した宇宙観・陰陽五行説に基づく思想で、日本には奈良時代以前に渡来していたが、大宝元年（701）、大宝令において陰陽博士らの手に委ねられることとなり、政治をはじめ日常生活に多大な影響を与えるようになる。
- 16) 八束清貫（2002） 55頁より引用
- 17) 熱田神宮文化課（1993） 39頁より引用
- 18) 熱田神宮文化課（2001） 18～19頁を参照
- 19) 神職は、「身分」・「職階」・「階位」の分類がある。職階・階位は、神職になるための基礎資格であり、身分は神職になった者に与えられる。身分は神職の経験功績を反映し、上位から、特級・一級・二級上・二級・三級・四級の六等級がある。職階は職位のことで、宮司・権宮司・禰宜・権禰宜の順である。階位は、神職を務める上で必要な知識・学識の段階を示す。上位から、浄階・明階・正階・権正階・直階の五等階がある。宮司及び権宮司代務者は、権正階以上、禰宜及び権禰宜は直階以上の階位を有するものとされる。装束は、この身分、職階、階位によって着用される。
- 20) 武田佐知子（2001） 147頁より引用
- 21) 武田佐知子（1991） 149頁より引用
- 22) 神社本庁（1991） 50～51頁より引用
- 23) 神社本庁教学研究所（2004） 120～121頁より引用
- 24) 吉野裕子（1984） 151頁より引用
- 25) 吉野裕子（1992） 33頁より引用
- 26) 吉野裕子（2000） 49頁より引用

#### 参考文献

- 01、熱田神宮文化課（1999）『企画展 神様へのお供え』熱田神宮宮庁
- 02、熱田神宮文化課（2001）『熱田神宮』熱田神宮宮庁
- 03、熱田神宮文化課（1993）『新春特別展 御装束神宮の美と技』熱田神宮宮庁
- 04、小池三枝（1998）『服飾文化論』光生館
- 05、神社本庁（1972）『神社祭祀関係規程附解説』神

- 社新報社
- 06、神社本庁教学研究所（2004）『神道のいろは—神社とまつりの基礎知識—』神社新報社
  - 07、武田佐知子（1989）「古代日本海の交通と衣服—シンポジウム古代日本海域の謎Ⅱ」新人物往来社
  - 08、武田佐知子（2001）『古代国家の形成と衣服制—日本海の交通と衣服—袴と貫頭衣—』吉川弘文館
  - 09、武田佐知子（1991）『古代国家の形成と衣服制—袴と貫頭衣』、吉川弘文館
  - 10、鳥居本幸代（2005.4）「平安朝装束を彩る重色目」、国文学50（4）通号 学燈社
  - 11、東京国立博物館・大阪歴史博物館・社団法人霞会館・産経新聞社編（2008）『第62回式年遷宮記念特別展 伊勢神宮と神々の美術』東京国立博物館
  - 12、鳥居本幸代著（2005）「平安朝装束を彩る重色目」、国文学50（4）通号722学燈社
  - 13、八束清貫（2002）『神社有職』神社本庁
  - 14、吉野裕子（1984）『陰陽五行と日本の民俗』人文書院
  - 15、吉野裕子（1992）『隠された神々—古代信仰と陰陽五行』講談社
  - 16、吉野裕子（1992）『隠された神々—古代信仰と陰陽五行』隠された神々—』講談社
  - 17、吉野裕子（1984）『陰陽五行と日本の民俗』人文書院
  - 18、吉野裕子（2000）『陰陽五行思想からみた日本の祭り—伊勢神宮祭祀—大嘗祭を中心として—』人文書院、

図1、熱田神宮文化課：企画展 神様へのお供え、p16、熱田神宮宮庁、平成11年10月

図2、熱田神宮文化課：秋季企画展 熱田神宮のご遷宮、p5、熱田神宮宮庁、平成19年9月

図3～13

早川撮影



